

民俗博物館だより

Vol. XI No. 1

1984. 6. 25



▲野神まつり(御所市蛇穴)

目 次

大和のはたおり(テーマ展紹介).....	1
苴・畚織り用の箆について(物質文化⑫).....	3
—奈良県立民俗博物館収蔵品紹介—	
ハンゲショ(ハゲッショ)(大和の民俗行事③⑤).....	5
三宅町石見のノガミまつり(調査抄報⑳).....	6
博物館通信・お知らせ・他.....	7

大和のはたおり

大宮守人

1. はじめに

今回のテーマ展では、かつては女の仕事として日々の暮らしの中にあつたはた織りの技術にかかわる民具資料を通して、今と昔の暮らしぶりの違いの一端を紹介することにした。

今日では、衣料は買う暮らしが主流となっているが、昔は家で作るものであり、主婦や姑の大切な仕事であった。また、嫁入り前の娘にとつてもはた織りの技術の良否は良い嫁の条件として重要であり、母親や祖母の指導を受けて紺緋や縞などの布地を織って、織りの腕前の証明とし、嫁入り支度の一部に加えたものであった。

こうした技術は、家族の衣料を確保すると共に、農閑期における賃仕事として女手による数少ない収入の道でもあったので織りの技術は女の仕事として大切な伝承技術であった。

2. 展示の構成

県内に残る、日々の暮らしの中で育まれ伝えられて来た染織技術を昭和46年度に収録したが、これを『はたおり—女の仕事—』として約10分程度にまとめた3面マルチオースライドによって、まず伝承技術としての織りの概要を紹介した後、木綿織りの工程を実際に用具に糸を装着して示し、織りの用具がどのような姿で使われるのかをできるだけ具体的に展示しようとした。

- ①綿繰り……収穫した綿の実を取り除く
- ②綿弓……実を除いた綿花の繊維を綿弓の弦で弾いてほぐす
- ③糸紡ぎ……ジンキという1握りほどの筒状の綿から、糸車を使って撚りをかけながら糸にし、巻き取る
- ④経糸の準備

糸を巻いた糸枠を並べ、必要な長さとし、織り幅を満すだけの糸の本数を整えたあと、千切り棒に巻き取る

- ⑤もじり通し・箆通し

経糸の上下をペダル操作によって入れ替えるための糸製の2つの釣具に糸を

1本おきに分けて通した後、織り幅を固定し、緯糸を打つ道具である箆に糸を通す

- ⑥緯糸の準備

糸車を使って糸を竹の小管に巻き取り、杼に装着する

- ⑦機上げ……経糸を機に取りつけ織り始められるように調整する

以上の工程を藍染めの糸を縦縞紋様にセットして示したが、映像と実物によつても初めての者には理解がなおよむずかしい様子であった。

3. 体験コーナーの設置

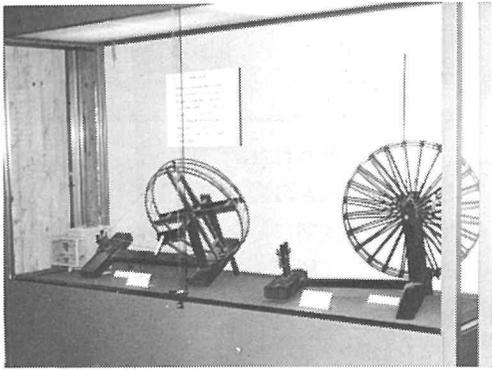
この展示を見た上で、さらに織りの原理を完全に理解したいという観覧者のために原始機と呼ばれる原始的な地機の用具を貸して展示室で指導し、織り上げてもらうというコーナーをはじめて設置してみた。

新聞などで広報をせず、このテーマ展を見に来た特に意識の高い観覧者の利用を期待したが、まる1日～2日要するこの体験コーナーの利用は少ない様子である。4月10日から現在(6月5日)までの利用者は5名であったが、織りの原理を習得するには大変役立ったと好評であった。

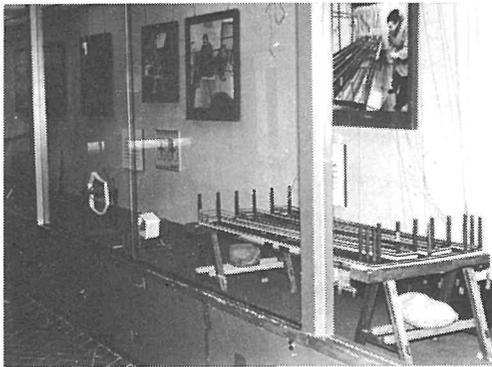
このコーナーの原始機は、過去3ヵ年にわたって体験学習講座「初歩のはたおり」で行ったものを活用しているわけであるが、体験学習講座への応募の多さからして、展示室での希望者が少ないのは、実施方法の違いや広報の有無によるものと思われる。ある程度広報をすれば利用者もふえると思われるが、悲しいかな展示の担当者のみでは対応しきれない状況が出る可能性もあり、現状では広報をさしひかえざるを得ない。

4. 展示室における体験学習講座の実施

これも今回初めての試みである。このテーマ展の期間中に3ヵ月連続の本格的な機織りの体験学習講座を実施し、これをテーマ展のコーナーで行おうというもので、すでに5月19日～20日に第1回目を行い、経糸の準備前



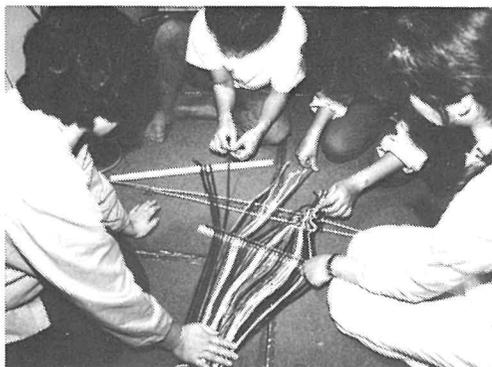
▲展示状況



▲展示状況



▲体験学習講座「はたおり教室」 整経(1)



▲体験学習講座「はたおり教室」 整経(2)

半までを進めている。このあと、6月16日～17日に、機上げ・織りつけ・織りへと進み、この後7月21日～22日の織り上げまでは連日展示室で機織りの響きが絶えない状況になると思われる。

この体験学習実施のために、2年前から当館収蔵の機40台のうちから6台を選んで修理をした他、整経台6台、糸車・座繰・杼・総車などの用具を修理して来たわけである。

過去3ヵ年続けて来た体験学習講座「初歩のはたおり」では、織りの基本技術を理解することに主眼を置き、使用する用具も当館収蔵の民具資料を使わず、塩ビパイプを使って原始機を真似た用具を作って実施していたのであるが、当館における本来の体験学習の目的は、収蔵している民具資料を実際に使うために伝承技術の調査をふまえて使いこなしの技術を復原し参加者に普及するのが本旨であり、「初歩のはたおり」における原始機の体験学習は、この準備の一部であったといえる。

今回の「はたおり教室」で使用した機は、大体同型の「大和機」と呼ばれる傾斜の強い高機で、明治7年と記されたものもあり、これよりも古いと思われるものも多く、総て100年以上前のものと考えられる。

従ってこの機を今日でも使用している人は全くなく、細部の使い勝手は不明な点が多く復元的に使用する中で、痕跡などをよりどころに探り出すということが必要となって来る。

本来伝承の備っているべき民具資料であっても細部については遺物的資料といわなければならない点も多く、民具研究を進める上では考古遺物などと同様、数多く収集する中で形態研究の成果を導き出す必要がある。

今日の日常生活では、はた織りの用具ほど種類が多く複雑なものを生活用具として使いこなすということが少なくなっており、複雑高度なものはあっても必ずしもシステム全体を熟知して使用しなければならないものが無く本来人間が持つべき物事を見分ける目の幅もせばまっているのではないかという感じをこの展示を担当して強く持った。

なお、展示及び、体験学習の実施にあたり多大のご指導を下された松本美保先生に心から御礼申し上げます。

苧・沓織り用の箆について

徳田陽子

—奈良県立民俗博物館収蔵品紹介—

今回は、当館の分類表による手工・製造(K)の細工・製造(B)のうち藁細工(I)に分類している苧機・沓織機の付属具の一つである箆について紹介したいと思う。

現在、収集した苧機・沓織機を整理中である。資料名は、寄贈を受けたときに聞いた名称に従って苧機・沓織機等と書きわけている。しかし、同じ苧機を使い、苧のときは苧用の箆を、沓のときは沓用の箆を使用して、使い分けているところも多い。

苧機(写真1-2)は、台の上に2本の木枠を立て横棒をわたして組み立てたものである。苧を織るときに、縦糸にする細縄を箆の小穴に1本ずつ通して織り幅を固定し、横棒に縦列にかける。この箆の柄を動かして、細縄を交互に1本ずつずらし、この細縄の間に苧針で横から藁を送る。その藁を箆で押し詰めて織り目を整える。このとき、箆に力を加えるので、箆の小穴の先の部分が細縄とすれてだんだん摩耗して変形する。そのため、箆によっては、変形した小穴の内側に金輪をはめこんでいる。

このような苧機を当館では収集しているが、付属具の完全に揃った苧機は少ない。しかし、苧機の付属具の一つである箆は、苧機の付属具として一括して寄贈を受けるだけでなく、箆だけ寄贈を受ける場合もあり、かなり収集している。又、苧機は、製作の段階で箆は堅木屋、その他の付属具は大工が作る事が多く、材質や技術の違いがあったことがうかがえる。そこで、苧機・沓織機の付属具の中でも特に重要な役目を果たす箆に焦点をあてることにした。

当館で収集している箆の点数は23点である。そのうち、苧用の箆は17点、沓用の箆は6点である。この23点を県下市町村別にみると、47市町村中16市町村から収集していることがわかる。特に、苧用の箆の場合、北部は奈良市から南部は吉野郡まで広域にわたっている。十津川村武蔵のようにガマ苧織りをしているところもあるが、県下で広く苧織りをしてい

たことがうかがわれた。

箆の形は、丸太の形を残した円柱型と、木を削って六角柱型にしたものがある。後者は十津川村武蔵(写真1-1)の2点と山添村広代の1点だけで、あとはだいたい前者の類型である。十津川村武蔵の場合はガマ苧織機の箆であるから、ガマ苧を織りやすいように工夫した結果だろうか、あるいは、地域的差異だけであろうか。さらに、調べて明らかにしていきたい。

縦糸を通す箆の小穴の数は、苧用の箆では23か24の場合が大部分である。23あるいは24の穴の端から端までの間の長さの、箆による差も5.4cmしかない。これは、苧の主な使用目的が靱干しであり、ほぼ苧の大きさが決まっているからである。それに対し、沓用の箆は、12、14、15、18の穴数の箆がほぼ同数ずつあり、箆の穴の間の長さの差も26.1cmと大きい。これは、沓の場合は、沓に入れる穀類や野菜等によって運びやすいように大きさをかえるからであろう。

又、沓用の箆には、はじめから沓用の長さに製作したものと、苧用に製作した箆の痛んだところを切って沓用の箆の長さにして柄を付け直したものとがあった。

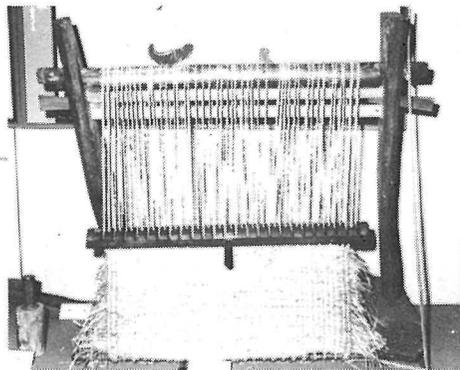
墨書銘や焼印のある箆もあった。田原本町多の沓織機の一部である沓用の箆(写真2-2)には「明治貳拾八年 吉川〇〇」という墨書銘がある。吉川というのは寄贈者の名字であるから、吉川という人が明治28年に箆を購入したのであろうと推測することができる。

都祁村吐山の苧用の箆(写真1-3)には「大兵」という焼印があるので、この箆を製作した堅木屋の屋号の類ではないかと考えられる。

以上、当館で収集した苧用の箆と沓用の箆の一覧表を作成し、推察できることを書いてきたが、今後、さらに苧機・沓織機を収集して、機全体の構造の比較等をしていきたい。

箄の一覧表

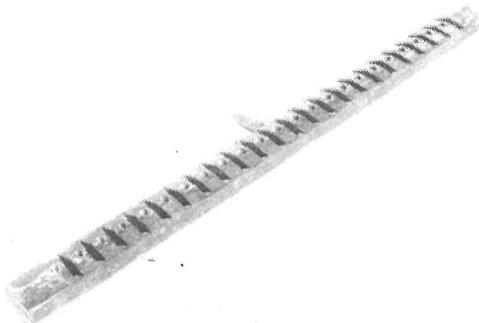
分類表	分類番号	名称	材料	穴数	穴間長さ (全長)cm	点数	採集地	分類表	分類番号	名称	材料	穴数	穴間長さ (全長)cm	点数	採集地										
手工・製造	KB イ	1 庭用の箄	木	23 (1-1)	(番号) 94.6~	6	生駒郡安堵村岡崎、宇陀郡菟田野町大神、北葛城郡上牧町五軒屋、吉野郡下市町仔邑・十津川村武蔵 矜預舒					26 (1-4)	102.8 (112.2)	1	五条市二見町										
					96.5 (104.9~109.3)											24 (1-2)	93.9~ 99.3 (101.2~108.8)	8	大和高田市片塩御所市東佐味、生駒市小明町・北田原町、山辺郡山添村広代、生駒郡斑鳩町小吉田、宇陀郡菟田野町古市場、北葛城郡王寺町本町	24 (1-5)	103.9 (112.6)	1	北葛城郡王寺町本町		
					95 (104)																			1	山辺郡都祁村吐山
																2. 畚用の箄	木	12 (2-1)	45.1, 47 (46~59.3)	2	磯城郡田原本町多				
																						14 (2-2)	62.7 (71)	1	高市郡高取町佐田
					18 (2-4)	69.8 (74.5)	1					北葛城郡王寺町本町													
												6													
				合 計													23								



▲庭機 (大和高田市片塩・1-2)



▲畚用の箄 (田原本町多・2-2)



▲庭用の箄 (十津川村武蔵・1-1)



▲庭用の箄 (都祁村吐山・1-3)

ハンゲシヨ (ハゲッシヨ)

浦西 勉

今日の田植はかつてより少し早くなっているということをよく耳にする。以前は、田植は六月中に行われていた。この田植時期を示すことばに、セツダ(節田)・チューダ(中田)がある。セツダとは芒種ぼうしゆの頃で、今なら六月五日か六日頃で、このころに田植をする田のよび方である。多く山間の田をこのようによぶ。これに対して、チューダは夏至時分の六月二十日頃に田植をされる田のことで、多く盆地部の田をこのようによぶ。この、セツダとかチューダとかいうよび方は、今から考えるとどうして何日という日を定めなかったのかと思われるが、それなりの理由がある。かつて、私達の暦は月の満ち欠けによって数えられた大陰暦を使っていた。日を数えるには確かに月を見ればほぼ何日と言うように、数えやすいが、太陽の運行によって変わる季候のほうは全くわからない。農耕を中心としていた私達の祖先は、太陽の運行によって変わる季候の方が重要であった。これは、太陽の運行によって定めた二十四節気を使った方が農耕するには便利であったのである。たとえば、山添村室津の中窪寿雄氏所有の暦には田植始めの日のことが記されている。^{注1)}

弘化五年(1848)	四月廿五日	田植始め
嘉永二年(1849)	閏四月十二日	〃
〃 三年(1850)	四月十六日	〃
〃 四年(1851)	五月 三日	〃
〃 五年(1852)	四月十四日	〃

大陰暦の日を使うと田植始めの日がばらばらであるが、これらの日はほぼ芒種(五月節<新暦6月6日頃>)に当たり、日を言うより田植は「節」と定めておいたほうが通りが良かったのである。



さて、前置が長くなったが、このころセツダ、チューダと二十四節を使ったよび方のほかに、ハンゲシヨあるいはハゲッシヨとよばれる日がある。夏至(チュー)から十一日目の日をこうよばれ、今日では七月二日である。奈良盆地においてたびたび耳にすることばで

ある。『日本民俗地図(I)年中行事』(国土地理協会)では香芝町五位堂が報告されている。それによると、「真宗の家ではハゲッシヨ、浄土宗の家ではサナブリといっているアキジマイのことである。小麦ダンゴをつくり、豆の粉をつけて食べる。またハゲッシヨダゴとっていいだこを酢の物にして食べる』とある。特別盛大な行事をするわけではないが、小麦団子(小麦餅)を作り、ところによれば神社におこもりをするのである。行事は決して盛大ではなくても、農耕を営む者にとっては重要な節目であったようで

① ハゲッシヨハン作

(この日までに田植を終えな
ければとれ高が半分になる)

② ハゲッシヨから昼寝

(この日から昼寝をする)

③ ハゲッシヨのアズケウシ

(盆地の牛を山間にあずける日)

④ ハゲッシヨに畑に入るな

(ネブカ畑に入ると目がつぶれる)

⑤ ハゲッシヨの小麦餅(この日に作る餅)

ということばを重ね重ね耳にする。始めに示したように、太陽の運行にしたがって名づけられたこのハゲッシヨの日も、農耕をする者が学びとり身につけたものであろう。そして、この日は農耕を営む者にとって、田植の完了とあわせて裏作であった麦の収穫の日でもあるのである。この日作る小麦餅はその麦の収穫の祝いの意味もあろう。『譬喩尽』にも「半夏生には小麦団子を祝食するもの」とあるところから各地で小麦餅は作られたのであろう。

かつての私達のくらしの中で暦は大陰暦を使用しながら、太陽の運行を根本にして考え出された二十四節気や七十二候を適宜に吸収して大切な節目をつくり、祀りごとをしたと思う。

①東山村史編集委員会『東山村史』

200ページ~207ページ(昭和36年発行)

三宅町石見のノガミまつり

横山 浩子

ノガミまつりは、大和盆地一円で行われている、年中行事の代表的なものの一つであるが、各所それぞれ特色ある内容を持っている。

今回はその中から磯城郡三宅町石見のノガミまつりを紹介しようと思う。

ノガミまつりの多くが新暦または旧暦の端午の節句の頃(5月乃至6月初旬)に集中しているが、石見でも行事が5月5日に行われる。

この大字では本来まつりを行う主体は子供達(但し男子のみ)である。

中心となってその重責を果たすのは親と呼ばれる数え年15才の子供達で、その上で子と呼ばれる14才の子供達が手伝う、という形である。

現行のまつりの次第は以下のとおりである。

まず事前に子供達がまつりの費用を集めて回る。その際、昔は新しく男子の出生した家は祝儀をはずむ。また牛を持つ家では別に麦5升を出すことなどあったという。

まつりの前日(4日)午前9時頃より氏神の鏡作神社に於て蛇を作る。

昔は子供達自身で作ったが10年余り前から池本常春氏(M.38.5.1生れ)が作り、親の家のものがそれを手伝って作っている。

稲藁で蛇を作り梯子にくくりつけるが、この材料は親の家で準備したものである。

そして蛇の表一面に境内でその日切った杉葉を挿し込み、翌日まで神社に置いておく。

午後から親の家で、翌日配る小餅と餡付け餅を作りにかかるが、これは10年程前から始まったことで、以前は今里との境にあった今

里屋という店であつらえた。

5日、まつり当日。

午前6時神社に親、子、それにアブとも呼ばれる親が招待した子供達(男子)、介添の大人達が集まり、親を先頭に子供達が蛇を担いで、大字の東南の方向にあるノガミサンの塚までいく。

塚につくと屋形の前に一旦蛇を置き池本氏が「禊ノ祓」をあげ、皆で拝んだ後その前で子供達が輪になってしるしだけ御神酒をいただき、餡付け餅を食べる。

蛇は梯子からはずして屋形の後ろに頭を辰巳の方向に向けて置いておく。

蛇はその後頭近くにある木から天にのぼるのだという話もきかれたが、現在では実際にそれにあたるような木はなかった。

昔はこの塚で竹の子御飯なども食べ昼すぎまで遊んだものだというが、今はすぐ塚から帰り、各家に餅を配り、最後に親の家のうち一軒に集まり御飯などいただく。

お金は親が責任を持って精算し、余剰は、親の裁量によって子供達に分配される。

ノガミまつりの親を勤めることは子供達の一つの区切となっており、(村では元服と言っている)その年の冬に青年団に入ることが許されることになっていた。以上石見のノガミまつりの概観であるが、それは、基本的には奈良盆地南部に集中的に見られる蛇をかついで行って塚でまつるといった型のものであり、またまつりの機能を子供組との関わりにおいてとらえることのできる一事例である。



▲氏神サンから蛇をかついで出発する



▲ノガミサンの塚(南方から望む)

◆◆ 博物館通信 ◆◆

民俗博物館が開館して十年になろうとしている。この間、奈良県下全域の民俗資料所有の方々や、市町村の教育委員会の方々から、好意的な民俗資料(特に有形の民俗資料<民具>)の所在の連絡を受ける。その連絡をもとに、当館の学芸員が現場に出向き民俗資料の調査及び収集という作業を行っている。このようにして収集された有形の民俗資料が14,000点あまりにもものぼる。民俗資料とは、私達庶民の生活の推移(歴史)の理解には欠くことのできない資料である。あまりにも身近な日常生活用具なので特別に意識しないであらうと、なくなってしまうものばかりである。しかし、それらの民俗資料はその土地において長い歴史とそれぞれの自然環境とのかかわりあいであつちかわれたものであり、そこには人々の生活の知恵やものの考え方、感じ方などが表われており、私達の本質的な素顔を示す貴重な文化財である。このため、民俗資料が消えてなくなる前に調査し収集・保存を行っているのである。このような思いで、収集を重ねてくると最初何の特色もない民具であっても、民俗資料を群として見たとき大変意義あるものが生じてくる。たとえば、一昨年度、奈良県有形民俗文化財の指定を受けた「吉野の山村生産用具」(1,226点)もその一例であり、この地域についてかたろうとする時、この民俗文化財は重要な意味を持って来よう。この地域にとってはもちろん、

奈良県において貴重な文化遺産が保存されたということになろう。

ところで、左に示したように有形の民俗資料は少しずつ充実して喜ばしいのであるが、反省する点もないわけではない。その一つは、有形民俗資料のかかわる連絡が、家をこわすとか、すぐすてるなど緊急な場合が多く、そのため十分な調査が行われぬまゝ、収集したのも多数存在する。その時、十分調査しておけば資料的価値が一段と高まったものも少なくないと思う。これは、調査が後手に回ったために生じたので、今後、民俗博物館収集資料地域をチェックして、収集の不十分な地域などを検討し、先にそれらの地域を計画的に集中調査をする必要がある。

もう一つの反省として、民俗資料の中には有形民俗資料と無形民俗資料がある。前者は民具ともよばれ、後者は民具の使用のしかたや風俗・習慣、年中行事など目にはみえても形として残らぬものも民俗資料である。この無形民俗資料の収集は、記録化という作業が必要である。記録化の方法として、報告書、白黒フィルム、スライドで行っているが、まだまだ不十分でこの部分の収集(記録化)も計画的に行わねばならない。

ともあれ、まだまだ今なら収集しておける民俗資料(有形・無形をも含め)が多数存在している。今後も、県民の方々や市町村の協力を得て調査、収集をせねばならない。奈良県下の人々の生活の変遷をかたれるのはこれらの資料によるのである。

(浦西勉記)

★★★★ おしらせ ★★★★★

●民俗博物館の行事予定

☆テーマ展「大和のはたおり」 S59年8月25日(土)まで開催

☆体験学習講座「はたおり教室Ⅲ」

S59年7月21日(土)～7月22日(日)

※受講者は「はたおり教室Ⅱ」から実習を行なっている方々に限りますが、実習見学はご自由になれます。

☆民俗カルチャー講座「民俗コースⅠ」

コーステーマ「住いの民具と習俗」

●「住いと民具」 講師・岩井宏実氏

S59年6月23日(土) 午後2時より

●「台所の習俗」 講師・林 宏氏

S59年6月30日(土) 午後2時より

●「住い、暗れと藝」 講師・平山敏治郎氏

S59年7月7日(土) 午後2時より

☆特別テーマ展「大和の年中行事」

S59年9月7日(金)から10月13日(土)まで

★予 告★

◎民俗カルチャー講座 民俗コースⅡ

S59年10月13日(土)から10月27日(土)まで(毎週)

◎民俗カルチャー講座 民家コース

S60年3月10日(日)から3月17日(日)まで(毎週)

☆体験学習講座「シメナワづくり」(定員80名)

S59年12月6日(木) 午後1時より

【表紙解説】 農村では、毎年定まった日にその年の豊作を祈願する祭礼＝まつりが行なわれる。このまつりを農耕儀礼と呼ぶ。この農耕儀礼の一つに〈野神まつり〉があり、県下の各地域で5月～6月にかけて行なわれる。〈野神さん〉という樹や祠で、五穀豊稔を願って祀りごとを行なうが、地域によって祀り方も異なることが多い。この御所市蛇穴の〈野神まつり〉はワラでつくった蛇を村中練り歩いて〈野神さん〉へいく。この蛇の頭に特色をみせるのが、蛇穴の野神まつりである。

■編集後記■

今春の天候不順は、初夏に入った今も続いている。例年にない気候の変化が、自然界の生きものや人々の暮らしに戸惑いを感じさせている。この「変化」がいつまで続き、どのように生きものであるかは人に、影響を及ぼすものか、予知し得ないが、これが今の現実である。

公園も、民家も、そして博物館も十年目を迎えるに際して少しずつ変わってきつつあるが、この「変化」は十年目という〈節〉によるものかもしれない。(つ)